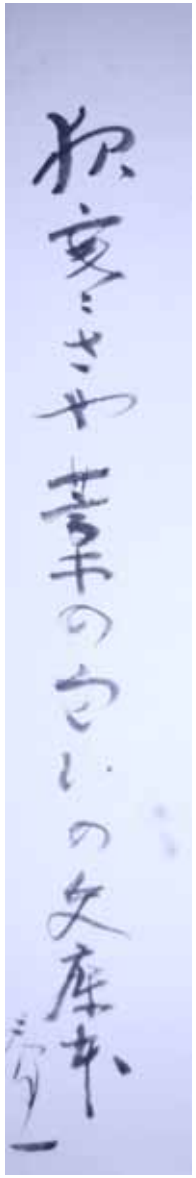
あさ 11

2023

一巷壺



夜寒さや藁の匂ひの文庫本

瀧春一

あを

十一月集

THE・俳1

佐藤　竹僊

原つぱに名前のありて糞バツタ

雲の穴ぽつかり夏の空がある

水底まで水がつまつて忍野盛夏

あんな遠くの蟻がうごいてゐるのが見ゆ

めまとひが杖のはやさのあとさきに

その中の一番ゆるるゑのこ草

ブルーベリー畑に狗尾草きれい

立秋の水面をよごし雨が降る

秋風にひれふすごとき野面かな

屋上は地面のつづき秋の雨

蟋蟀が鳴いたと八月廿九日

パン食べてハリガネ残る冬近し

冬鴉電線くぐり下りてくる

ＭＲＩ宇宙遊泳してきたる

神輿

森　なほ子

人気無き住宅街を行く神輿

神輿一服住宅街の小料理屋

昼神輿時に掛け声張り上げて

鉢の木に揚羽産卵す無造作に

結末を蝶は知らざり産卵す

十匹の芋虫飢えて葉の無き木

頭頂を並べて詫びて秋暑し

九十度折りし腰見る秋思かな

小望月

赤座典子

静まれる稲田の柔きたまごいろ
白露の夜真犯人の判明す
秋天や国籍変へるアスリート
秋の宵推しの投手は現れず
屋烏の声厨に届く秋の夕
栗を食み新聞を読み子の帰る
バリ島の蜂蜜石鹸豊の秋
敬老日我等にゲーム三回券
遙かなる太白照らす小望月

秋暑し

秋川泉

豪雨あり七夕の夜の透き通る
八月の挽歌かすかな風渡る
るんるんと柿二個買ひに三兄弟
どかどかと座敷に上り柿を食ふ
秋刀魚だよ十円だって早く来て
秋暑し猫を呼べども返事せず
日に射られ腕ひりひりと秋に入る
水不足稲穂のびぬと座り込む
むっくりと朝夕のびる彼岸花
秋暑し風邪長引きて昼の夢

甲州路

七郎衛門吉保

甲州に抜ける古道曼珠沙華
秋澄めり甲武の峡の一軒家
腸くらふ秋刀魚高値の苦味かな
群鳥の啄む稗のうねりけり
堰外し一服の田にコンバイン
百越への十万越へや敬老日
六甲に歓喜の嵐台風来
無花果や脈打っている花模様
紅き肌一日が命の落ち柘榴
星の秋父母の眼差し億光年

鉦叩

篠田純子

四阿にミスト秋あかねとしばし
磯蟹の巣穴ここそこささと影
夏痩せて鎖骨のパーツ外れさう
川涼しスターマインの果てしより
鉦叩潜む観葉植物レンタル中
ビルの地下連れて来られて鉦叩
鉦叩き地下空間に響きをり
恋成就まで只管に鉦叩き

まつさら

篠田大佳

花手水敷き重陽の大神宮
人の背に高く社の牽牛花
夢に学ぶ古典文法秋涼し
秋雨に濡れ真つ新な横断旗
まつさらな卒塔婆確かめ秋彼岸
秋彼岸古刹は土地を切り崩す
少年の老ゆれば秋も喧し（かまびす）
曼珠沙華愚痴に澱んだ店を出て

ほぼ元気

須賀敏子

ほぼ元気少し歩いて曼珠沙華
色なき風されど暑さの続く日々
重なりて重たげに行く赤蜻蛉
庭先に稲架組む家や恵那の旅
ちょっぴりの飛騨牛旨し秋麗
少さき花おまけの様に朝顔が
南瓜煮る少し大振り甘くして

雑詠

都築繁子

転送の美しき朝焼け秋さやか

我が町にサンバの響き秋暑し

駅中のパン屋のコーヒー秋はじめ

まとひ付く秋の蚊犬の散歩道

新幹線通過のホーム秋日濃し

若人の自撮りの笑顔九月尽

残る蝉

長崎桂子

スーパーブルームーン秋涼の時に感謝

ちちちちと啄む庭や小鳥くる

梨頂戴す隣人に感謝と礼を

麻の服着たとて駄目や秋あつし

登り来て流れに映える薄紅葉

法師蝉坂の流れに唱和して

残り蝉追いかける子の数多し

地区の老人の秋の合掌発表会

新種らし秋の花ばな店頭に

町筋や木犀の香の漂ふて

烝収集

殴られて帰る猛暑の影法師　亀田虎童子

¤

一葉づつそれぞれうごき葛の原　佐藤　竹僊

白南風や跣で波打際ゆく　長崎　桂子

白南風に手足をかざす昼さがり

芋虫に断固スプレー二度三度　森　なほ子

山澄めり村人六百五十人　赤座　典子

少年の片腕だけの日焼け跡　秋川　泉

落蝉の強く鳴きては手を離れ

熱波にも命名せむと終戦忌　七郎衛門吉保

がうがうと空調服のすれ違ふ　篠田純子

瑠璃色の蝶たもとほる潦

暗記の古語はアイスコーヒーにじむ　篠田大佳

サイダーが喧嘩の中に立つてゐる

八月や死語の手帳に平和の字

新築の家に赤ちゃん秋初め　須賀敏子

蓮の葉の重しほっほつ花開く　都築繁子

九月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

ぶだう吸ふ男の顔をととのへて　　亀田虎童子

『ホトトギス』十一月号に「芭蕉忌や現代俳句てふ虚ろ　稲畑廣太郎』の句を読んだ。句中の〝現代俳句〟とは何を指しているのか定かでないが、現在結社誌・俳句総合誌に発表されてゐる俳句は現代の俳句である。もしかしたら自省の句かもしれない。

掲句の艶冶な作品は「現代の俳句」には稀なのか、または私のアンテナが、この方面に向いてゐないのかもしれない。「ととのへて」は、自己分析、自己描写のたくみさに憧れる。このやうな句境の作品が品を落とさず仕上げるのはさすが。虎童子さんは〈俳句はつまるところ表現だ〉という意味のことをよく言はれてゐた。テクニック至上主義と反発を受けやすいことだが、私も同感してこれまで俳句を作ってきた。それにしても「男の顔をととのへて」はしびれるフレーズである。（喜孝）

鳥籠にたいくつな鳥敬老日　　亀田虎童子

鳥籠の中にいれば安全ですが、鳥にとっては退屈です。敬老日という季語を当てて、籠の中の鳥と高齢者とを重ね合わせている様子を想像します。（大佳）

退屈な日を退屈に種なすび　　亀田虎童子

「退屈」とは「平和」といってもいいでしょう。「退屈」ときくと幼児期に味わった退屈さを思い出します。毎日何もすることがない退屈さ。この先、老いて何もすることがなくなったとしても、俳句があるから退屈はしないで済む、筈だがどうなるか？　それもできなくなったら、平和な極楽なのかもしれません。種なすびがふて腐れていて絶妙ですね！（なほ子）

雨やどりしたくて梅雨の晴間かな　　佐藤竹僊

雨宿りの情緒に憧れて、梅雨の軒先に立つ作者。しかし、雨はちょうど上がっていて、雨宿りができなかった。みんな忘れているけれど、誰もが持っている童心をくすぐります。（大佳）

日盛りで月命日でリハビリに　　佐藤竹僊

この異常な暑さの中の一日を、何事もないように淡々と詠んでおられます。作者は暑さにめげず、月命日を忘れず仏壇にお参りし、日盛りにサボる様子もなく、リハビリに出かける。「六月の竹林」の句とどちらにするか迷ったが、人間くさいこの句の親しみ深さを頂きました。（なほ子）

盆踊り櫓見下ろす茜雲　　都築繁子

今夜の盆踊りに備えて、櫓も早々と組まれ夜を待つばかり。空には夕焼けに染まった雲が広場を見下ろしています。踊りが始まる前の静かなひととき。郷愁を感じさせる句です。（なほ子）

解体のふるさと思ふ遠花火　　都築繁子

「解体のふるさと」とはだういふことか。ふるさとがふるさととして存在できないまで人口が減少して村や町として機能しなくなつたといふことか。

むかし、芦ノ湖で花火を見て宿泊先に戻るとき山越しにまだ花火が行はれてゐるやうで、音のみが花火特有の威圧感のあるドーンではなくポンと気の抜けた遠花火の音だった。私の体験とてらして「遠花火」が効いてゐる（喜孝）

向日葵畑広し戦禍の地の悲し　　長崎桂子

ひまわりと戦争にイメージの連想を覚えます。戦地にひまわりが多く咲くところでは、ひまわりは生命を象徴し、戦争は死を象徴するという映像作品上の対比構造が多く、それが印象付けられているようです。生き生きとしてかつ翳りのある、ひまわりが示す映像は導入にもなり、結末にもなります。映像が倒置できる日が来ることを願います。（大佳）

菜食の日々疲れたり蝦蛄ゆでる　　長崎桂子

自発的に菜食をなされてゐるのか。医者に勧められての菜食なのか。壮健な桂子さんには菜食では体力が維持できないことだらう。疲れたりと率直な吐露で「蝦蛄ゆでる」と。こちらもちよつと口元がゆるむ。（喜孝）

星涼しジュラ紀白亜紀遥かなり　　森なほ子

星の光によって遥かな時間の流れを想起し、地球の同時代を想像しています。暑さのピークを越え、夜も比較的過ごしやすくなった安堵感もあり、時間に対する敬意も深くなっているようです。（大佳）

横向いた頃に風来る扇風機　　森なほ子

日常の何気ない事がらに興味を持ち一句をなす。俳句作りの一つの楽しみ。上手く詠めたときのよろこびが私にも伝はる。馬鹿にはできない俳句のひとつのジャンルである。（喜孝）

頼しき子の食欲や夏座敷　　赤座典子

小さいときは漫然と美味しい食べ物を食べていましたが、年を重ねると、若い人がたくさん食べている光景が微笑ましく、頼もしく見えます。熱の籠った小さい人と、夏座敷の涼しさに、大きなエネルギーを予感させます。（大佳）

屋上にテーブルと椅子月涼し　　赤座典子

この屋上はビルなどの屋上ではなく自宅の屋上。私も屋上のある家に住んでゐた。建てた時は屋上が珍しくて、よく食事をしたものだ。

掲句、欲を欠かず表現したことで成功した。「月涼し」の月は屋上では邪魔をするのは雲ぐらいである。（喜孝）

高僧の氷菓づくしの誕生日　　秋川　泉

「高僧」という言葉に、質素な生活をしている高齢の宗教人を想像します。「高僧」が誕生日の贅沢として選んだのが氷菓で、甘味の贅沢を味わった喜びと、そんなに冷たいものをいっぱい食べて大丈夫かなという心配を読みます。（大佳）

子ら集ひ泥足すすぐ日向水　　秋川　泉

「日向水」は忘れかけてゐた懐かしい言葉だ。調べたら確りと歳時記に収まってゐた。よかった。少し前の世の中の一景とも見える。「日向水」の懐かしさに惹かれて鑑賞した。（喜孝）

安全と云はれ廃液夏の海　　七郎衛門吉保

福島第一原子力発電所の事故処理で、建屋の中を巡った水（汚染水）をＡＬＰＳ処理した水（「処理水」）を海洋放出したことについての句と読みます。放出の是非は世論を分けて、扱いが繊細になっています。掲句は、まだ方針の段階で議論していた頃の句で、夏の海が穏やかに感じられます。（大佳）

残鶯に押され坂道山の湯に　　七郎衛門吉保

山を登つてゐるとき背中を押してくれたのは涼しい風と鳥の声、特に鶯の声には励まされる。掲句は登山ではなく山中にあるいで湯に向かふ坂道である。残鶯に山の湯の期待も一段と高まったことであらう。（喜孝）

鬼灯の花は白なり母とゐて　　篠田純子

誰にもあった母といる時間は、ある時から途切れてしまう。この句のように、母との時間をいとしんで過ごしたことがあっただろうか。鬼灯の花は白く、小さくて地味です。（なほ子）

鬼灯の花の色を印象付けることに成功してゐる表現。なほ子さんの的確な読みで母を静かに偲ぶ作者が浮んでくる。俳誌を読んでゐると「考・妣」の漢字が頻繁に使用されてゐる。使はなくともわかるやうに詠むのが表現力。掲句はそのあたりを見事にクリアしてゐる。ついでに「義母・義父」も好きではない。（喜孝）

釣竿に糠雨のさす川蜻蛉　　篠田大佳

細い釣竿の先端に、雨の中でも最も細かい糠雨が降りかかり、辺りには蜻蛉の中でも小柄な川蜻蛉が飛んでいる。なんとも静かな繊細な句です。一番小柄なのは糸蜻蛉ですが、沼地などの草むらにいるようなので、やはり川には川蜻蛉ですね。（なほ子）

夕焼や最後の旅を助く医師　　篠田大佳

別れの体験を句にされた。その時の夕焼が殊のほか印象深くのこつたのだらう。

闘病中の妻が最後に笑つたのが病床で主治医との会話の中でであった。妻も若い主治医を信頼してゐた証左であらう。

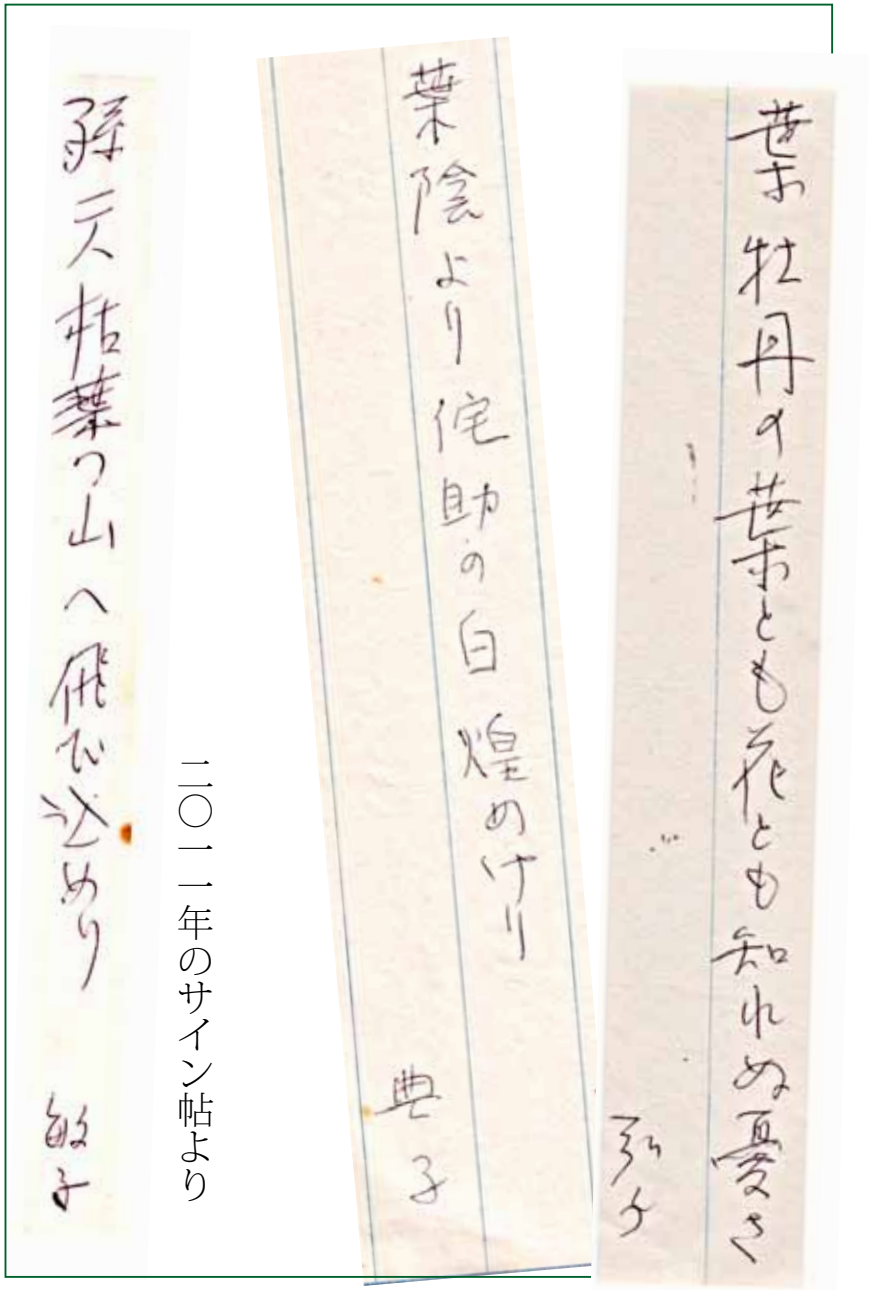
掲句からつひ私事に思ひがめぐらせてしまつた。「助く」は医術のみでないことは自明。「助く」を印象深く読ませていただいた。（喜孝）

さっと来て桃一箱の置土産　　須賀敏子

います、こういう人。『風と共に去りぬ』のような。いいですよね、お礼をいう暇もなくさっと行ってしまいます。きっと面倒臭がりなのでしょう。逆の人もいますけど。以前にも桃の句ありました。句材をも提供してくれる有難い知人、大事にしましょう。（なほ子）

壊しても壊しても蟻土を盛る　　須賀敏子

蟻が巣を拡張してゐるのだらう。土塊を咥えて出てきて巣の脇に積み上げる。「壊しても」はこの盛り上げた土を「壊しても」かと思ったが、そうではなく必要があって巣を作者は壊してゐるのではないか。（喜孝）



二〇一一年のサイン帖より

あとがき

遅刊寛恕

今月は私事で時間を取られあを発行遅れに遅れました。このあとがきを書いてゐる少し前に娘がＭＲＩを含めた診断を聞いてきてもらいました。画像からは歩行が困難な原因はつかめない。りはびりにつとめなさい、といふ診断でした。ご心配おかけしましたが私の努力の不足といふことでした。ご心配おかけいたしました。

虎童子先生の作品

先生の作品が届かぬ月は、先生の旧作を勝手に使はせていただゐてをりました。心苦しく思ってをりました。先日、先生より所蔵の短冊を沢山いただきました。貴重な短冊なのでそのやうな月に使はせていただくことにいたしました。本当は一句でもよろしいので、新作をよろしくお願いいたします。前ページの俳句短冊はうっすらとした記憶ですが、傳句会の後、新年会として近くのチェーン店で乾杯をした折の記録です。その年のお題が「葉」だったので皆さんに御題で作っていただきました。今日は三人だけですが載せさせていただきました。

短文のお願ひ　題「為残したこと」

為残したこと

チンドン屋ピアノ初戀富士登山　　竹僊

旧作ですが好きな句です。皆様のしのこしたことありますか、あればお聞かせください。（喜孝）

二〇二三年十一月号
発行日　十月二十八日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井２　一階
電　話　０９０　９８２８　４２４４
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番０１８）４５８６４０２
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）